

英語学習における効果的な意識および行動要因の検証

－アンケート調査に基づく考察(2)－

菊地大輔

(1) はじめに

本研究は、英語学習の進捗に影響を与え得る要素を見出す研究として、100名の調査対象者から得たアンケート結果を分析する。アンケート内容86項目のうち、前半43項目については、すでに公表済みであるため、本論文では後半43項目について分析し、総合的な考察を加えたい。

(2) 調査研究

(2-1) 被験者

アンケート調査を行った被験者は総数100名、年齢は18歳から42歳である。被験者の学歴は、大学生、または大学あるいは短期大学の卒業生である。後述の基準に基づいて被験者を上位クラスと非上位クラスへと分類した。上位クラスに属する被験者は11名であり、一方、非上位クラスに属する被験者は89名である。

(2-2) 研究方法

研究方法については、すでに公表済みの論文において詳述したが、ここで再度、要点をまとめておきたい。アンケートには、回答者が取得している英語の資格（合格した英検の級数、TOEICやTOEFLの点数）についての記述欄を設け、回答者を高い英語運用能力を備えた上位クラスと、それ以外の非上位クラスとに分けた。回答者の中から上位クラスに属する人を選別する基準は、便宜上、TOEICスコア730点以上の取得者、または英検準1級合格者、またはそれに準ずる人とした。

以下に、アンケート後半の質問項目と回答結果を示す。回答方法としては、各質問に対して、(1)全く当てはまらない、(2)あまり当てはまらない、(3)どちらともいえない、(4)やや当てはまる、(5)非常に良く当てはまる、のいずれかを選択してもらった。

結果の集計は、各クラスにおいて、質問ごとに全回答者数に対する各回答者の割合を百分率で算出した。なお割合を算出した際に小数点以下を切り捨てたため、1つの質問に対する各回答の割合を合計しても必ずしも100%にはなっていない。集計結果は、以下の通りである。

44	英文の構造を意識しながら英文を読む	0	14	14	28	42		16	18	26	20	18
45	英文法項目を意識しながら文を読む	0	0	28	28	42		18	13	31	25	10
46	一定の速度で英文を読む訓練をする	57	14	14	14	0		35	16	31	9	7
47	先の内容を予測しながら英文を読む	0	0	42	28	28		31	23	27	9	7
48	内容の分かっている英文を1回あるいは何回も読む	14	14	57	14	0		22	21	29	19	6
49	英文を前から読む練習をする	0	42	14	28	14		20	17	34	19	8
50	英文の多読に取り組む	0	28	14	57	0		24	20	33	13	7
51	量を重視して英文を読むのと、細かく分析しながら読むのとを場合に応じて使い分ける	14	14	14	57	0		19	20	35	16	8
52	英文を読む際、翻訳する必要がある場合を除いて、きれいな日本語に訳すことにこだわらない	0	0	14	14	71		12	16	27	22	20
53	英文を読む際、意味を完全に理解することが必須の場合を除いて、大体の意味が分かればよしとする	14	14	14	42	14		9	7	25	34	22
54	分からない英単語が殆ど無いような簡単な英語の読み物を読む	14	42	28	0	14		23	25	31	15	4
55	「英語を読む」というインプットを重視している	14	42	28	0	14		26	19	36	11	5

56	雑誌や新聞記事、趣味関連、娯楽等の色々な内容の英文を読む	14	42	0	14	28		33	28	22	10	4
57	日本語には無い英語独特の表現(例:関係代名詞を含む文等)をなるべくそのまま理解できるように読み取りの方法を工夫する	0	14	28	42	14		21	20	35	18	3
58	英語そのものを学ぶのではなく、英文を読んで情報を得る	0	0	28	71	0		25	31	30	9	3
59	生の英語を読む	0	0	14	57	28		38	26	21	8	4
60	英語を聴く時間を自主的に設ける	0	28	28	28	14		28	27	31	6	5
61	英文の構造を意識しながら英文を聴く	14	28	42	14	0		21	35	34	5	3
62	英文法項目を意識しながら文を聴く	14	28	28	28	0		26	28	33	6	5
63	先の内容を予測しながら英文を聴く	0	14	28	57	0		33	27	30	7	1
64	内容の分かっている英語を1回あるいは何回も聴く	0	28	28	42	0		30	23	30	11	3
65	英語を聴く際、翻訳する必要がある場合を除いて、きれいな日本語に訳すことにこだわらない	0	0	14	14	71		18	14	26	25	15
66	英語を聴く際、意味を完全に理解することが必須の場合を除いて、大体の意味が分かればよしとする	14	0	0	42	42		14	10	23	29	21
67	英語をたくさん聴く	0	28	28	0	42		24	24	28	12	10
68	英語を聴くというインプットを重視している	14	14	28	0	42		26	27	30	10	5
69	報道、趣味関連、娯楽等の色々な内容の英語を聴く	14	14	14	28	28		29	29	17	14	8
70	日本語には無い英語独特の表現をなるべくそのまま理解できるように聴き取りの方法を工夫する	0	42	14	28	14		31	24	31	8	3
71	英語そのものを学ぶのではなく、英語を聴いて情報を得る	14	0	42	28	14		32	25	32	5	4
72	生の英語を聴く	0	0	28	42	28		29	27	30	8	4
73	独り言を言うかのように頭の中で英作文を行なう	14	28	0	42	14		42	22	23	8	2
74	英語を話す機会を提供する学習会に参加する	28	14	14	0	42		52	21	21	4	0
75	自分で使いそうな英語表現に出会ったら、ノート等 に書き留める	42	14	0	28	14		39	18	23	11	6
76	自分で使いそうな英語表現に出会ったら、ノート等 に書き留め、覚える	28	14	0	28	28		40	19	25	11	3
77	シャドーイングを行う	14	42	14	0	28		42	17	25	14	1
78	英語で表現しようとしたができなかった表現を覚えて おいて後で確認する	28	0	28	28	14		34	20	26	15	3
79	英語の手本の発音に限りなく近づけるように自分の 発音を矯正する	14	0	28	28	28		33	17	28	16	4
80	英語そのものを学ぶのではなく、会話するために英 語を使う	0	0	42	14	42		27	19	32	14	5
81	英語の定形表現を覚える	28	14	14	42	0		23	13	36	17	8
82	英文を日記やエッセイ等を通じてたくさん書く	33										

85	以前に他人が書いた文の単語の一部を変えることによって英文を書く	28	28	0	42	0		44	25	20	7	2
86	自分で書いた英作文をネイティブまたは英語のできる日本人に添削してもらう	14	14	42	14	14		45	21	20	11	0

(2-3-1)

問 44 から問 59 は、リーディングに関する方略の使用に関する。問 44 は、文の構造を意識しながら英文を読むかを問うている。

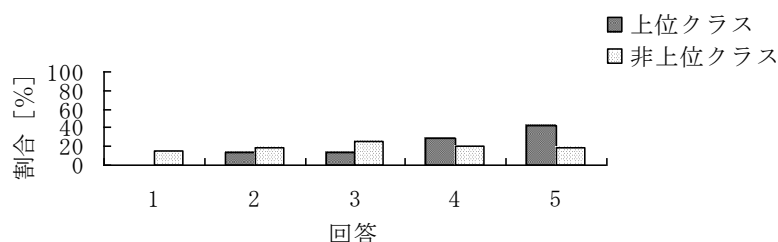


図44： 問44「構造を意識しながらリーディング」の回答結果

結果を見てみると、上位クラスでは、4または5の回答者が 70%に達する。一方、非上位クラスでは、全ての回答の割合がほぼ均一であって傾向は認められない。問 21 に関する分析の際に述べたように、一般問題解決能力に頼りながら英語の習得を目指す際には、英文の分析的な理解の可否が大きな鍵を握ると考えられる。上位クラス学習者の回答結果は、このような英語習得の戦略の重要性を支持しているといえる。一方、非上位クラスでは、4または5の回答者の割合は上位クラスの 70%を大きく下回り、2つのクラスの間歴然とした差が生じている。また、1または2または3の回答者の割合を加えると 60%に上り、非上位クラスでは、英文を漫然と読む傾向がはっきりと表れている。このように、両クラスの傾向の違いは明確である。上位クラスでは、英文を構成する単語同士のつながりを意識せずに、各単語の意味を根拠なしになんとか繋げて漫然と理解するというようなことをせず、形式面にも注意を払っているといえる。

問 45 は、英文法項目を意識しながら英文を読むかを尋ねている。

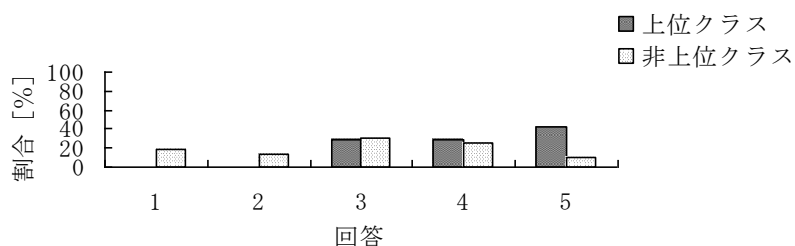


図45： 問45「文法を意識しながらリーディング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5の回答者の割合が 70%に上る。一方、非上位クラスでは、4または5と回答した人の割合と、1または2の回答者の割合とが拮抗し、傾向は見られない。上位クラスでは、非常に明確な傾向が認められ、例外なく多くの人が、単なる日本語訳以上の英文が持つ意味にも注意を向けている。英文理解を日本語訳の完成のみで済まさないためには、英文が含んでいる文法項目、つまり形式面にも注意を払うことが重要である。したがって本問の結果は、上位クラスの学習者が形式面に注意を払っていることを示唆しているといえる。この特徴は、上位クラスに特有である。

なお、問 44、問 45 の結果は、問 38 で上位学習者も英文法を重視していないという結果と矛盾するようにみえる。しかし、問 38 で尋ねることを意図していた質問の具体的内容が問 44、問 45 の質問である。

問 38 で用いた「英文法」という文言が抽象的であったため、筆者の質問の意図が回答者に伝わらなかったことが、この矛盾の原因であるようである。「英文法」という用語が、アンケートの回答者に、英文の理解・産出において何ら重要な役割を果たさないような試験を目的とした英文法項目を意識させたと考えられる。したがって、問 44、問 45 の結果と問 38 の結果は矛盾しない。

問 46 は、一定の速度で英文を読む訓練をするかを問うている。

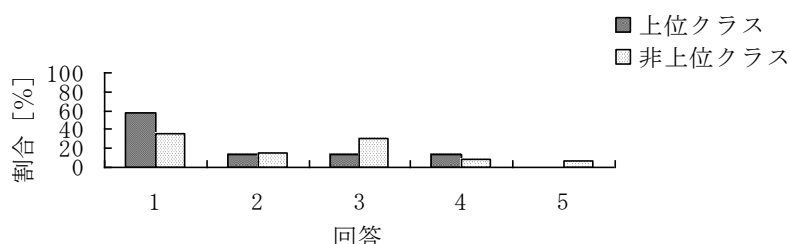


図46： 問46「一定速度リーディング訓練」の回答結果

リスニングにおいては、文の発話の進行を決める権限を持つのは話者であり、聞き手が任意に決定できるものではない。このため、リスニングの際に、発話の速度を聞き手の都合に応じて制御することや、理解できない箇所を聞き直すことはできない。この制約に順応するために、リーディングにおいても同様の制約を自らに課すことは、リスニング能力の向上をも念頭においたリーディング活動に有効であると筆者は考えていた。

しかし、本問の結果を見ると、1または2の回答者の割合は、非上位クラスで 51%と過半数であり、上位クラスでも 71%と、本問の方略は、いずれのクラスにおいても全く支持されない結果となっている。

問 47 は、先を予測しながら英文を読むかを尋ねている。

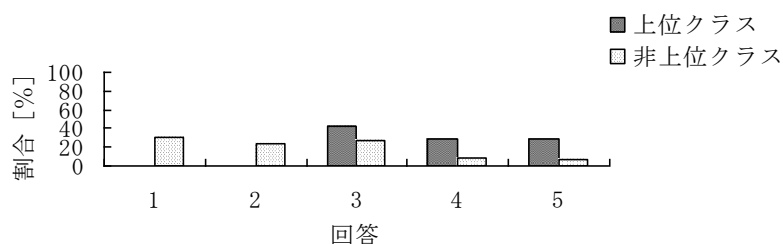


図47： 問47「先を予測しながらリーディング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 56%と半数以上であり、一方、非上位クラスでは、1または2と答えた人の割合が 54%と、こちらが多数派である。上位クラスでは本問の方略が支持され、非上位クラスでは支持されないという明確な結果が表れている。

リーディングの際に先を予測するということは読み手が英文の内容面に大きく注意を向けていることを支持する1つの材料になると考えられ、したがって上位クラスの学習者は、そのような読み方を実践していることが現れているといえる。

問 48 は、内容の分かっている英文を読むかを問うている。

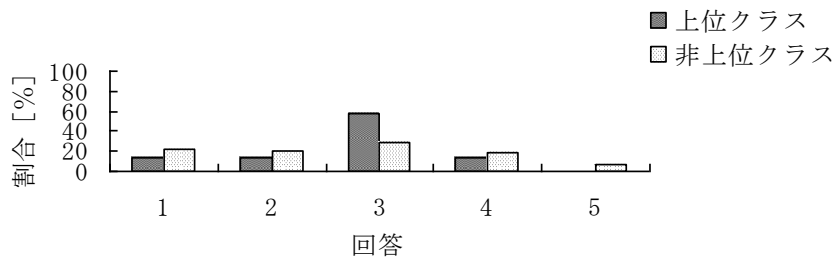


図48： 問48「既知内容のリーディング」の回答結果

英文理解の際に形式的な面の技術が不十分な段階にある学習者にとっては、内容面と形式面の両方に十分な認知上の注意資源を割くことが困難である。注意資源とは、注意の容量モデルで仮定されている概念であって、人間が様々な心的活動に振り向けることができる注意の量である¹⁾。

内容面と形式面の両方に十分な注意資源を割けない結果、形式面に注意が取られ過ぎて、文の意味を十分に汲み取れなかったり、内容に気を使うあまり、形式的な分析に裏打ちされた内容の理解が伴わなかったりすることが起こり得る。

したがって、このように英文理解の負荷が高い段階では、内容、形式のいずれかについての予備知識を学習者が持つことによって、一度に要求される負担を減らすことが有効である。相当実力のある人であっても、全く背景知識のない英文を読解することは容易ではないことから明らかである。実際、近時、和訳先渡し方式と呼ばれる、日本語訳を予め読んだ上で対応する英文を読む学習法や教授法が行なわれつつある²⁾。

しかし、問 48 の結果を見ると、上位クラスでは、5 の回答者は皆無であって、4 の回答者が 14%ある程度である。一方、非上位クラスでも 4 または 5 の回答者は 25%であり、このように、2つのクラスのいずれにおいても、本問の方略を支持する人は殆どいない。

問 49 は、英文を前から読む練習をするかを尋ねている。

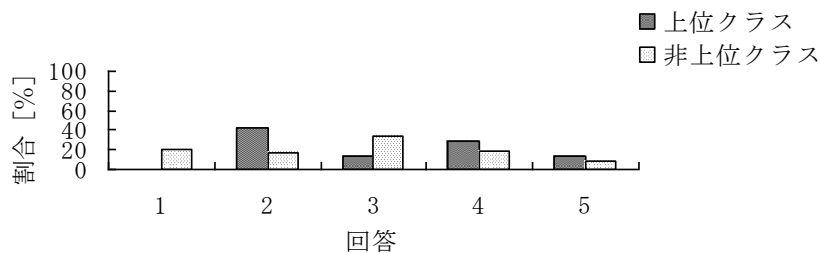


図49： 問49「直読直解訓練」の回答結果

結果を見ると、上位クラスで傾向は観察されない。非上位クラスでも顕著な傾向は見られない。日本語と英語の構造の違いに起因して特に学習初期段階に身に着いた戻り読みは、英文の直読直解を妨げるので、いずれかの学習段階で脱却されねばならない。

ところが、本研究の結果を見る限りでは、上位クラスの学習者も、そのことを特に意識したリーディングの練習を行なったということがない。したがって、本問の方略は、上位クラスにおいて広く支持されるようなものではなく、英文を前から読んで理解する技術は、リーディングを重ねることで、自然に習得できるといえる。

問 50 は、英文の多読に取り組むかを問うている。

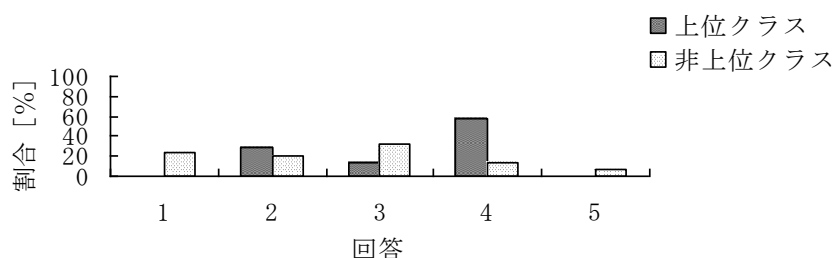


図50： 問50「多読」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4の回答者の割合が 57%と過半数である。非上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 20%と低く、1または2の回答者の割合 44%に劣る。

多読は、インプット量を劇的に増やすという点ではかの方略よりも英語の実力向上に大きな効果を持つ³⁾。しかし、意外ではあるが、上位クラスでも多読はそれほど強く広く支持されていない。それでも、非上位クラスよりは重視されている傾向にはある。

上位クラスでは毎日英語に触れている（問 33）ので、この活動を通じて、積極的に多読に取り組まずともインプット量を確保していると考えられる。したがって、結果的に多量の英文をインプットすれば、上位クラスのレベルには達することができるようである。

問 51 は、多読と精読を使い分けるかを尋ねている。

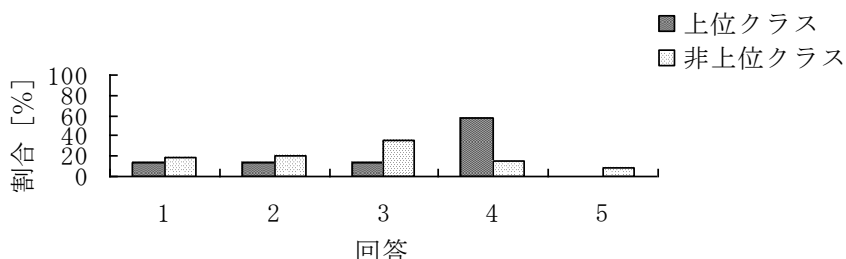


図51： 問51「多読と精読を使い分け」の回答結果

結果を見てみると、上位クラスでは、5の回答者こそいないものの、4の回答者の割合が 57%と半数を超えている。一方、非上位クラスでは、4または5の回答者は 24%に留まり、1または2の回答者の割合 39%の方が高い。

文章を分析しながら精読のみを行なうのも、形式面の分析を全く基盤とせずになんとか意味を獲得するのみの多読のみを行なうのも、リーディング能力の開発の点では不向き届きである。学習の初期の段階では文法知識を駆使しながら文を読む訓練を積み、分析的な読みを正確にまた楽にできるようになってきたところで多読を行なうことによって分析的なリーディングの自動化を押し進め、それ以降は、必要に応じて精読と多読を使い分けるという段階を踏むのが、リーディング能力の形式と意味の両側面をバランスよく開発するのに有効と筆者は考える。

上位クラスでは、文を分析的に理解し（問 45）、多読を行い（問 50）、これらの読みを使い分ける（問 51）という、一貫した結果を示している。対照的に、非上位クラスでは、そのように戦略の使い分けは行なわれていない。

問 52 は、特別な場合を除いて、きれいな日本語に訳すことに拘らずに英文を読むかを問うている。

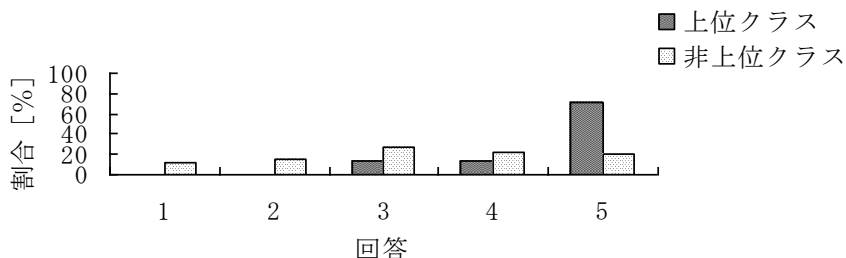


図52： 問52「訳を意識しないリーディング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5の回答者が 85%と大多数である。一方、非上位クラスでは、回答者の分布はほぼ均等で傾向は認められない。訳に拘ると意味の取得が疎かになることがあり、そもそもリーディングにおいて翻訳は必須ではなく、リーディングの主目的は意味の獲得である。上位クラスの学習者の殆どが、リーディングの本来の目的である意味の取得を行なっているという傾向がはっきりと表れている。

英文の読後にこの文を訳すことを予定していないので、文を頭から理解することができ、読む速度は上がり、さらに文の内容理解に十分な注意資源を割ける。このことが、上位クラスの学習者の英語運用能力が高い理由の1つといえるかもしれない。

問 53 は、リーディングの際、意味を完全に理解することが必須の場合を除いて、大体的意味獲得を目指すかを問うている。

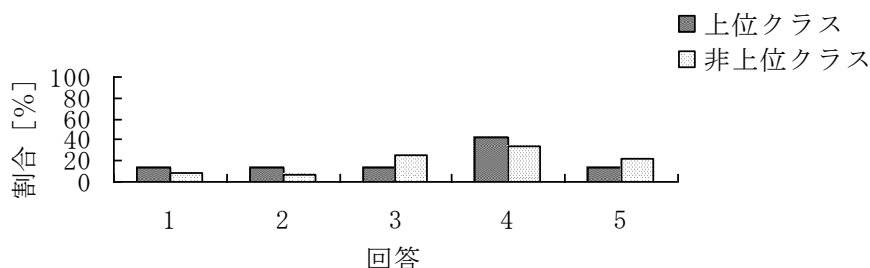


図53： 問53「大意理解を目指したリーディング」の回答結果

結果を見てみると、両クラスのいずれにおいても、4または5の回答者の割合が 56%と過半数を超えている。この問いの結果だけを見る限り、2つのクラスの間で差はない。しかしながら、問 44（構造を意識しながらのリーディング）、問 51（多読／精読の使い分け）と合わせて分析すると、結論が異なる。上位クラスでは、問 44 から文の構造をしっかりと意識することは押さえ、精読とそうでない読みを使い分けながら、問 53 のように必要時以外は、大まかな意味を取っている。これは、構造分析を介した理解を平時行なって、最低限の誤解釈は回避していることを意味する。

このような技術を身につけていることを前提として、個々の文章を丁寧に解釈しようと思えばできる場所、「木を見て森を見ず」を避けるべく文章の大意に目を向けている。一方、非上位クラスでは、英文の構造を意識するとか（問 44）、読み方を使い分けるとか（問 51）、多読を通じて経験的に正確な読みを身につける（問 50）とかを行なわずに、大体的意味の獲得で読みの目的達成としている。これは、厳密な解釈を可能にする技術を身につけていないまま、なんとなく文意を取っていることを表わしている。

このようなリーディングは、あたかも砂上の楼閣のようで、非上位クラスの学習者が正しい文意ができる可能性は、上位クラスの学習者に比べて低いと考えられる。また、上位クラスでは、形式に目を向けることができながら、それに費やされる注意資源の割合を下げ、意味の取得により多くの資源を割り当てており、正しい読みをある程度確保しながら意味に目をむけているので、**content based approach (CBA)** や **content based instruction (CBI)** 等に通じる、学習効果が高い方略であるといえそうである。CBA や CBI というのは、特定のテーマ（例えば環境問題）あるいは教科目（例えば心理学）が持つ内容＝情報・思想・知識が学習者に目標言語を使って教授される過程のことである⁴。

問 54 は、多読の一形態であり、極簡単な英語の読み物を読むかを尋ねている。

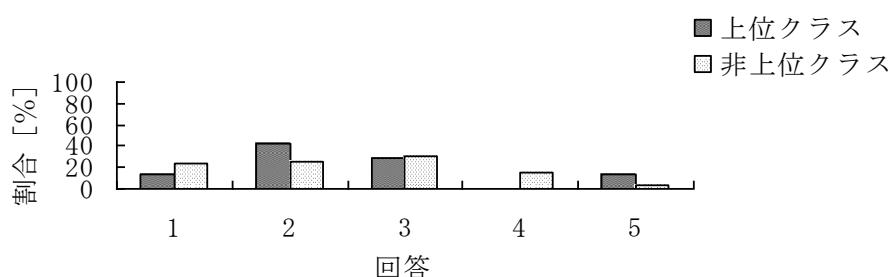


図54： 問54「極簡単な読み物のリーディング」の回答結果

結果を見ると、上位クラスでは、1または2の回答者の割合が 56%と多数派である。非上位クラスでも、1または2の回答者の割合が 48%とほぼ半数である。

多読の一形態として、極めて容易な読み物に取り組むことは、特に多読の初期段階で有効であるとも予想されたが、本問の結果から見る限り、この方略はいずれのクラスにおいても支持されていない。

問 55 は、リーディングを通じたインプットを重視しているかを問うている。

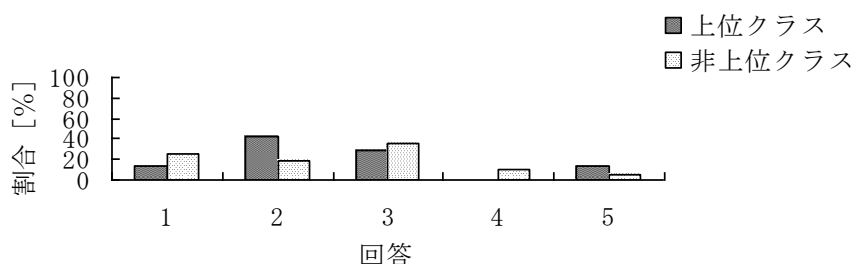


図55： 問55「リーディングによるインプット重視」の回答結果

結果は、問 54 と殆ど同じである。つまり、上位クラスでは、1または2の回答者の割合が 56%と過半数であり、非上位クラスでも、1または2の回答者の割合が 45%と半数に近い。本問の結果は、上位クラス、非上位クラスを問わず、リーディングによるインプット活動は特段意識されていないことを示している。

問 56 は、様々な内容の英文を読むかを問うており、問 54（極簡単なものを読む）と同様に多読の素材について尋ねている。

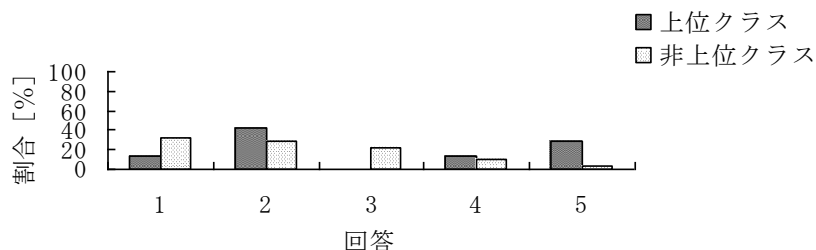


図56： 問56「多様な内容のリーディング」の回答結果

種々の内容を読むことは、一分野に限定されない様々な表現に触れてリーディングの応用力を高める点で有効であると筆者は考えるが、上位クラスでは、傾向は表れていない。なお、非上位クラスでは、1または2の回答者が61%と、こちらが多数派である。

問 58 は、英語リーディングを通じて情報を得るかを問うている。

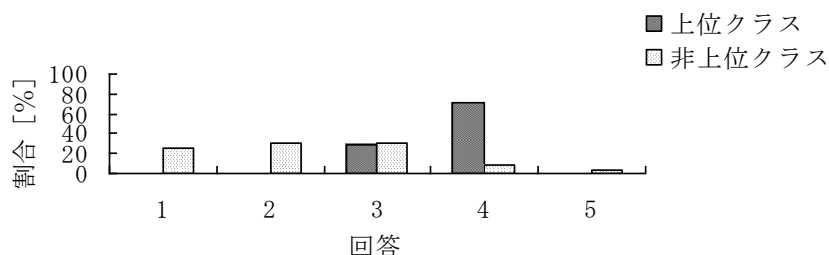


図57： 問58「リーディングを通じた情報取得」の回答結果

結果を見ると、上位クラスでは、5の回答者はいないが4の回答者だけでも71%ある。1または2の回答者は皆無である。一方、非上位クラスでは、1または2と答えた人の割合が56%と過半数である。2つのクラスで明確な違いが現れている。本問は、まさに英語の意味内容に注意を払った読みを実践するかを浮き彫りにするものである。

上位クラスでは、学習者が、意味そのものに注意を向ける活動を行なっていることがはっきりと表れている。対照的に、非上位クラスではそのような活動は行なわれていない。本問の結果の傾向は非常に顕著であり、意味に注意を向けたリーディングが英語上達に強く関与することが示唆されている。本問の方略は、CBA そのものである。CBA が有効な手法であることは実証されており、本研究の上位クラスの学習者もこの方略を通じて英語の実力を向上させたといえると考えられる。

上述のように、問 50（多読）、問 54（極簡単な読み物のリーディング）、問 55（リーディングでのインプット重視）、問 56（多様な内容のリーディング）の結果は、上位クラスの学習者が多読を意識的に行なわないという傾向を示している。英語の上達には、多量のインプットが不可欠であるにも関わらず、このような結果である。

これは、筆者にとってかなり意外であり、この結果を見るのみでは、上位クラスの学習者がどのようにインプット量を確保したのか不明である。しかし、問 58 の結果は、その疑問を明かす傾向を示している。つまり、上位クラスの学習者は、リーディング活動を性格づける様々な要素のうちで、量に関しては特に意識していないが、意味に注意を向けたリーディングを通じてイン

プット活動を行なっているということである。量の担保については、情報を得る目的のリーディングや毎日の英語との接触を通じて、量の増大を意識しなくとも相当量の英語に触れたのだと考えられる。したがって、とにかくたくさん読むという活動が、上位クラスによって否定されたのではないといえる。

問 59 は、生の英語を読むかを問うている。

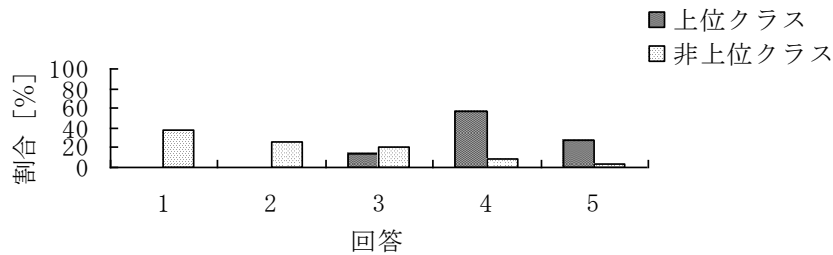


図58： 問59「生英語のリーディング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 または 5 の回答者の割合が 85%と高い。対照的に、非上位クラスでは、1 または 2 の回答者が 64%と大多数を占める。各クラスにおいて傾向が非常に明確であると同時に、2つのクラスの傾向の違いも明らかである。生の教材に取り組む学習者の割合と、英語運用能力に相関関係が認められる。インプットの量のみではなく、質（学習者向けに作成または加工されていない文章）にも注意を向けることの重要性が本問の結果から示唆されている。上位クラスの学習者の殆どが本問の方略を指示していることから、単に学習者用の教材に取り組むだけでは上位レベルに到達しないと言うことが可能と考えられる。

問 57 は、英語特有の表現を直解できるように理解の仕方を工夫するかを問うている。

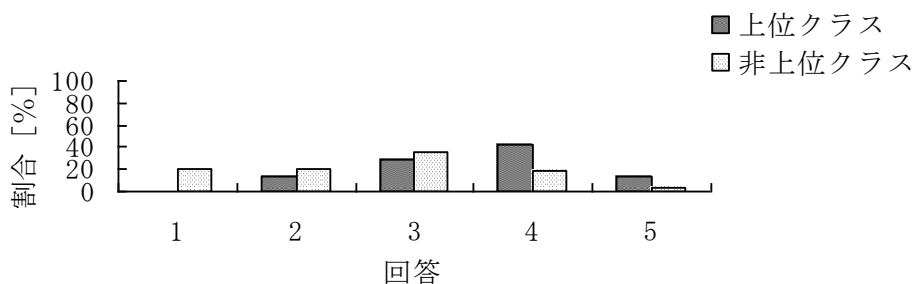


図59： 問57「直解のための読解法の工夫」の回答結果

結果を見てみると、上位クラスでは、4 または 5 の回答者の割合は 56%と過半数である。一方、非上位クラスでは、4 または 5 と回答した人は 21%にとどまり、1 または 2 と回答した人は 41%とこちらが多数派である。

生成文法の分類によれば、英語は主要語先頭言語であり、日本語は主要部末端言語であって、構造が全く異なる⁶。このため、英文を理解するには、日本語の理解の仕方とは別の方法を習得する必要がある。このことは、戻り読みを克服するためにも必須である。慣れを通じて自然に習得することも可能であろうが、効率が悪い。

上位クラスでは、英語と日本語との違いを意識する視点を持って、その違いを乗り越えて英語を理解する能力を高めようと努めていると言える。2つの言語構造の違いに目を向けるということは、上位クラスの学習者が英語の形式面に注意を払っている傾向を支持する材料として機能す

ると考えられる。本問の結果について上位クラスが示す傾向は上位クラスで特有であるので、本問の方略は英語運用能力の向上に関与していることが示唆される。

問 44 から問 59 の結果を総合してみると、上位クラスのみの特徴的な傾向として、以下の項目が挙げられる。上位クラスの学習者は、文の構造や文法項目を意識しながら英文を読んでおり（問 44、問 45）、形式を重視したリーディングを実践している。一方で、上位クラスの学習者は形式のみに注意を払って文ごとの意味取得のみに終始することはせずに、文章の意味の取得にも意識を向け（問 52、問 53、問 58）、必要に応じて正確な意味獲得を目指したリーディングと大意取得を目指したリーディングを使い分けている。これらの結果は、上位クラスの学習者が、形式と内容の両面を意識したリーディングを実践していることを意味していると言える。つまり、上位クラスの学習者は、形式に即した文の理解を基礎に据え、しかし文の形式面の解釈を目的ではなく手段として用いて、内容取得のためにリーディングを行なっている。このような活動は、CBA・CBI や、フォーカス・オン・フォームに通じるものがあり、これらの教授法が有効な方法であるとの指摘とも一貫している。なお、フォーカス・オン・フォームとは、学習者の注意を特定の言語形式に向けさせる指導のことを指す⁷⁾。

一方で、上位クラスの学習者であっても、リーディングの実力向上だけを目指した訓練は行なっておらず（問 46、問 48、問 49）、無理のないリーディング活動を行なっているものと考えられる。生の英語を読む（問 59）ことも特徴的であり、様々な英語を通じて応用力を鍛えていると同時に、学習者向けに簡略化されていない文を読むことから負荷は高いものの楽しみながらリーディングを行なっていると言える。一方、やや意外ではあるが、上位クラスであっても、必ずしも、リーディングを通じたインプット活動を重視しておらず（問 55）、また、それほど熱心に多読に取り組んでもいない（問 55）。

(2-3-2)

問 60 から問 72 は、リスニングの方略に関し、多くが問 44 から問 59 までのリーディングに関する方略のいずれかと同じ内容である。問 60 は、英語を聴く時間を自主的に設けるかを尋ねている。

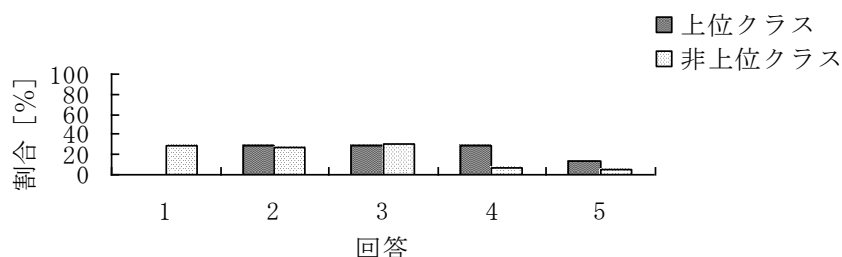


図60： 問60「リスニング時間確保」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 42%で、1の回答者は皆無となっており、肯定的回答者の割合が過半数には達してはいないものの傾向が認められる。一方、非上位クラスでは、1または2の回答者の割合が 55%と過半数に及ぶ。したがって、上位クラスのみで、学校の授業以外にもリスニングの機会を自発的に設けることが表れている。特に、我が国の英語の授業では、リーディングに割く時間が支配的でリスニング能力を向上させるための時間は絶対的に少ないと考えられる。これは、学校の授業の時間的制約からある程度仕方ないことであり、リスニング能力を開発するためには学習者が自主的に解決するしかない。これを実際に実行に移しているのが上位クラスの学習者であり、非上位クラスの学習者と対照的である。

問 61 は、英文の構造を意識しながら英文を聴くかを尋ねており、リーディングに関する問 44 に対応している。

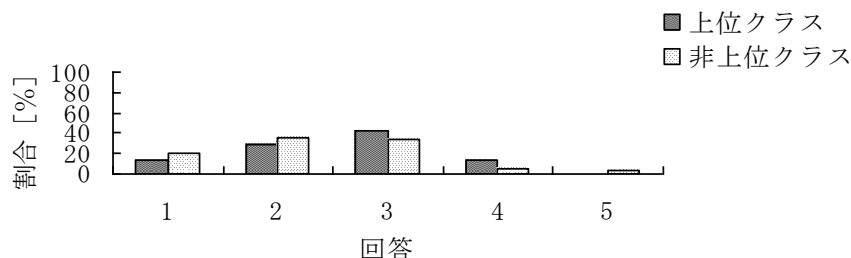


図61： 問61「構造を意識しながらリスニング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、1 または 2 の回答者が 42%と、4 または 5 の回答者の割合を上回る。非上位クラスでも 1 または 2 の回答者の割合が 56%と過半数である。これらの結果から、いずれのクラスにおいても、本問の方略が用いられていないことが明らかである。この方略が、英語の実力向上に大きく寄与することはないといえそうである。リーディングの場合の本問と同じ方略（問 44）が上位クラスで支持されているのとは対照的である。外国語のリスニングにおいては音そのものを聞き取る注意資源が必要な分、内容理解に費やすことができる注意資源が限られる。このため、リスニングの際に構造まで意識を払うことは注意資源の制約から無理ということのようである。

問 62 は、英文法項目を意識しながら英文を聴くかを問うており、リーディングについての問 45 に対応している。

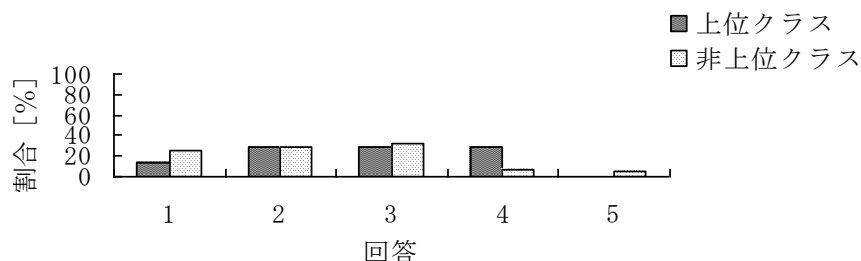


図62： 問62「文法を意識しながらリスニング」の回答結果

結果を見てみると、上位クラスで、4 と回答した人が 28%いるのみで、5 と回答した人はいない。非上位クラスでも 4 または 5 と回答した人は 11%と低い。問 61 と同様、本問の方略は用いられていないことが示されている。リーディングに関して本問と同じ方略の使用の有無を問う問 45 では上位クラスの学習者が高い肯定的回答（4 または 5 の回答者の割合が 70%）と対照的なものも、問 61 と問 44 との関係と同じである。やはり、リスニングにおいて割ける注意資源はそれほど多くなく、英文項目まで注意を払うことは難しいことが原因と思われる。しかし、いずれのクラスでも不支持であることから、この方略が学習の成功、不成功を分かち要素でもないようなので、採用する必要性も低い。問 61、問 62 を合わせてみてみると、読む際は、細かな箇所まで注意を払うが、聞く際は上位クラスの学習者でも細部を明らかにする文法事項にまでは注意を払っていないことが表れている。

問 63 は、先の内容を予測しながら英文を聴くかを尋ねており、リーディングに関する問 47 と同じ内容をリスニングについて質問している。

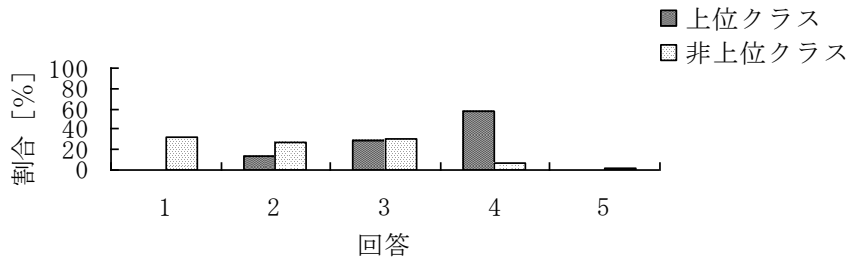


図63： 問63「先を予測しながらリスニング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4の回答者が57%と過半数を超えている。5の回答者はいない。なお、1の回答者もない。非上位クラスでは、1または2と回答した人の割合は60%に及ぶ。上位クラスでは本問の方略を利用している割合が高い傾向が見て取れる。リスニングにおいては、問 61 (構造を意識しながらのリーディング)、問 62 (文法を意識しながらのリーディング) から、形式的な側面にはそれほど大きな注意を払わず、その代わりに、本問から明らかなように、内容、特に先の内容を予測している上位クラス学習者が多い。形式に拘泥せずに、話者が伝えることを意図している内容により多くの注意を払っていると言える。

本問とリーディングについて対応する問 47 でも、上位クラス学習者は、4または5の回答者の割合は56%と高く、この点では、リーディングとリスニングで共通している。一方、非上位クラスの学習者では、先を予測するといった積極的なリスニングの姿勢は見られない。これは、単に、そのようなことを行なう余裕がないとも言えなくもないが、そもそも、今現在発せられている文のみでなく、複数の文が表現する話者の発話内容の全体像を掴もうとする姿勢、観点を持ち合わせていないのかもしれない。

問 64 は、内容の分かっている英語を聴くかを問うており、この問いとリーディングについて対応する問いは問 48 である。

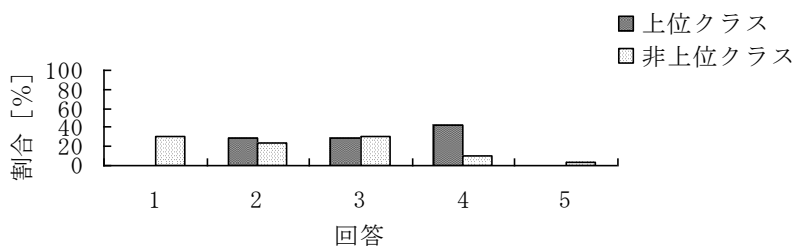


図64： 問64「既知内容のリスニング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4の回答者が42%であり、1または2の回答者の割合28%を上回っている。肯定的な回答者の割合と否定的な回答者の割合の差はそれほど顕著ではないが、緩やかな傾向が生じており、上位クラスでは本問の方略が支持されていると言ってよいと考えられる。非上位クラスでは、1または2の回答者の割合が53%と過半数である。

このように、2つのクラスの間で本問の方略の使用の有無の違いが観察される。内容を理解済みの音声素材を学習対象言語で聞くことは、内容理解に対して注意資源を割く必要がないので、単語や熟語の認識や、形式面の気づきを促すのに有効な方略と考えられる。

注意資源の制約から、外国語のリスニングでは内容理解に注意を向けるのが難しい。このため、内容を分かっている素材を聴く利点は、リーディングの場合よりもリスニングの場合の方が高いと考えられる。上位クラスでのみ支持されていることから、本問の方略は英語能力向上に有効であるといつてよいと考えられる。

問 65 は、特別な場合を除いて、きれいな日本語に訳すことに拘らずに英文を聴くかの問いであり、リーディングに関して問 52 と対応している。

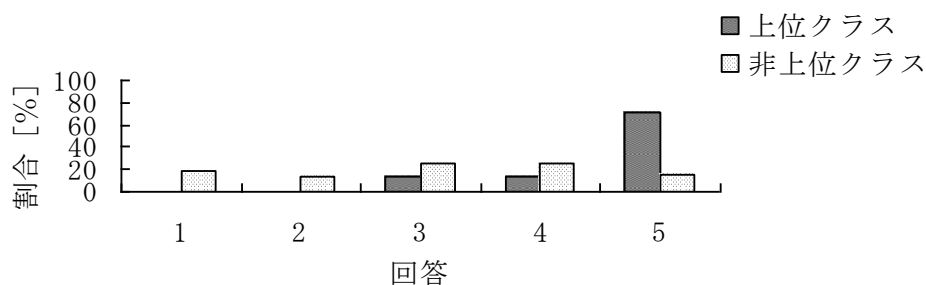


図65： 問65「訳を意識しないリスニング」の回答結果

結果を見ると、上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 85%と高い。非上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 40%であり、1または2の回答者の割合 32%とほぼ同じである。非上位クラスでも本問の方略の使用割合は高いが、非使用者の割合も高いため、使用者の割合が支配的であるとはいえない。一方、上位クラスでは、全員に迫る割合で本問の方略が支持されている。

問 66 は、リスニングの際、意味を完全に理解することが必須の場合を除いて、大体の意味獲得を目指すかを問うており、リーディングに関して問 53 と対応している。

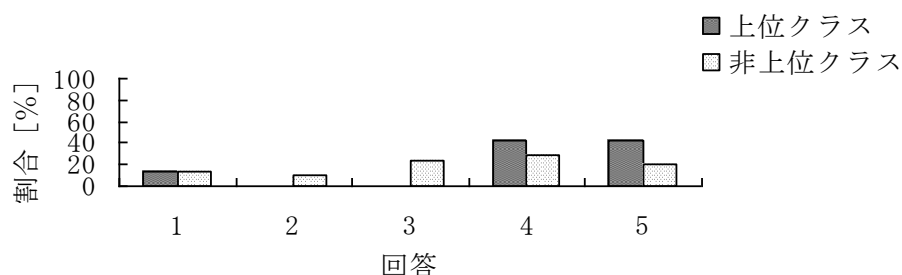


図66： 問66「大意理解を目指したリスニング」の回答結果

上位クラスでは、4または5の回答者が 84%である。非上位クラスでも、4または5の回答者が 50%と半数に達している。両クラスで肯定的回答者が過半数であるにも係らず、英語運用能力に上位クラスと非上位クラスで差がある。リーディングの場合でも、両クラスにおいて大意を取ろうとする傾向があり、上位クラスではこれに加えて形式面にも注意を払う傾向が見られたのに対して、非上位クラスではそのような基礎を持ち合わせていないことから、非上位クラスでは根拠の薄い大意の獲得を目指すリーディングが行なわれているといえる。対照的に、リスニングに関しては、そのような特徴は表れていない。

したがって、リスニングに関しては、細部に拘るか否かは、英語運用能力の向上に影響を与えないようである。

問 67 は、英語をたくさん聴くか、つまり多聴と呼ぶべき活動を行なうかを尋ねており、リーディングに関する問 50 に対応している。

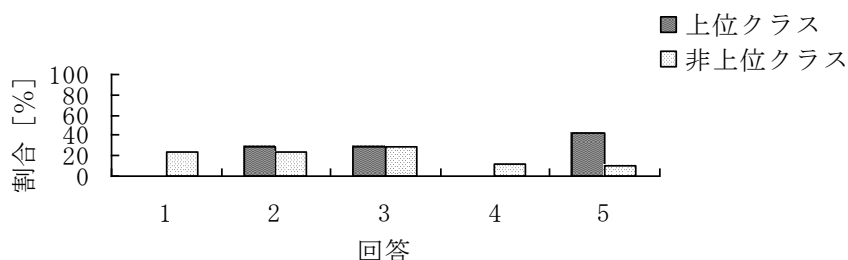


図67： 問67「多聴」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 と答えた人はいないが、5 と答えた人の割合が 42%である一方、非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合が 48%あって多数派である。上位クラスでは、肯定的な回答をした人の割合が否定的な回答をした人の割合を上回っているが、その差は顕著ではなく、傾向は緩やかである。さらに、肯定の回答者の割合が半数に達しているわけでもないの、本問の方略が上位クラスにおいて普遍的とはいえない。

上位クラスにおいて多聴がそれほど支持されていないことは、多読が支持されている（問 50）のと対照的である。リスニングを通じた多量インプットは、リーディングを通じたものよりも重視されていないようである。

問 68 は、リスニング通じたインプットを重視しているかを尋ねており、リーディングについての問 55 に対応する。

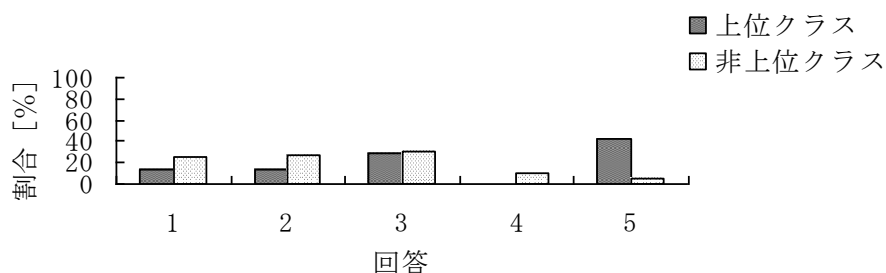


図68： 問68「リスニングによるインプット重視」の回答結果

結果は、問 67（多聴）とほぼ同じである。上位クラスでは、5 の回答者の割合が 42%であり、1 または 2 の回答者の割合 28%と大きな差はない。非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合が 53%で過半数である。上位クラスでは、緩やかな傾向は認められるが、本問の方略が支持されているとまではいえない。

問 67 の結果からも、上位クラスの学習者の中でも音声によるインプットはそれほど重視も実践もされていないようである。さらに、リーディングを通じたインプット重視ほど不支持（問 55）であるわけではないが、インプットがそれほど重視されていないのは、リーディング、リスニングに共通である。上位クラスでは、特に意識してインプットに取り組んでいるわけではないようである。

問 69 は、様々な内容の英語を聴くかを尋ねており、リーディングについて同内容を問う問 56 に対応する。

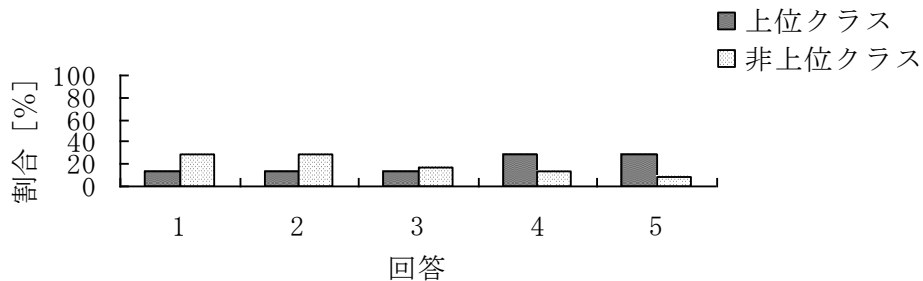


図69： 問69「多様な内容のリスニング」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 または 5 と答えた人の割合が 56%と半数以上であり、半数以上の学習者が本問の方略を行なうという明確な傾向が表れている。非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合が 57%で過半数である。したがって、本問の方略が上位クラスでは行なわれ、非上位クラスでは行なわれないという明確な傾向が観察される。

様々な種類の素材に触れることの有用性は、第2言語習得研究において立証されていないが、ある程度の効用があるのかもしれない。しかし、読みに関して本問と同内容の問 56 で際立った傾向が見られないことから、多様な素材を通じたインプットは、学習を成功に導く普遍的な方略とはいえないようである。

問 71 は、英語リスニングを通じて情報を得るかの問いであり、リーディングについて同内容を尋ねる問 58 に対応する。

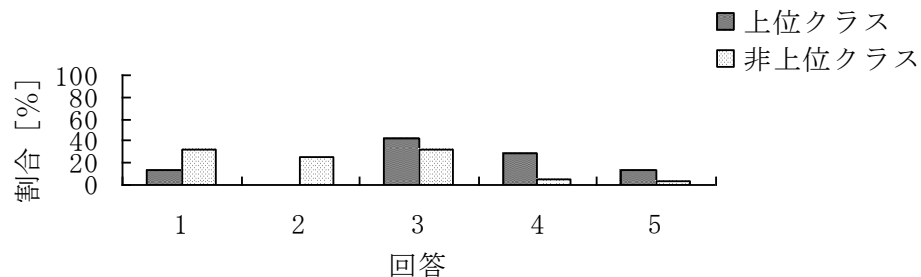


図70： 問71「リスニングを通じた情報取得」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 または 5 の回答者の割合は 42%であり、3 の回答者の割合と等しい。非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合は 57%で過半数である。上位クラスの肯定的回答者の割合 42%は、非上位クラスの 9%よりは高いが、上位クラスの中で広く支持されているとはいえない。したがって、本問の方略は、普遍的に有効な方略とはいえないようである。それでも、上位クラスでは、非上位クラスよりは高いので、内容に払ったリスニングを実践していることの有効性をある程度は示していると言えそうである。リーディングについて様々な素材に触れる明確な傾向（問 58）とは対照的である。やはり、リスニングに関しては、リーディングの場合ほどは、内容獲得を重視した活動は行なわれていない様子である。

問 70 は、英語特有の表現を直解できるように理解の仕方を工夫するかを尋ねており、リーディングについての問 57 に対応する。

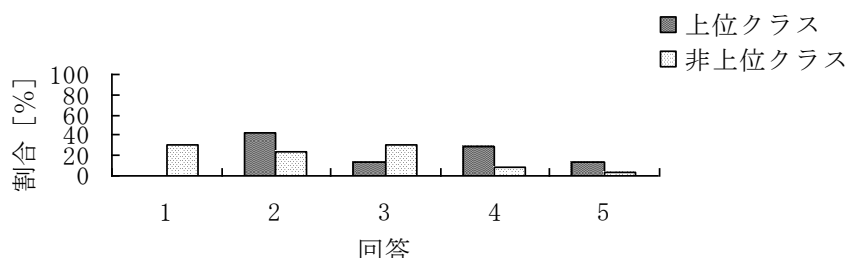


図71: 問70「直解のための聴解法の工夫」の回答結果

結果を見ると、上位クラスでは、肯定的回答者と否定的回答者は拮抗しており、傾向はない。非上位クラスでは、1または2の回答者の割合が 55%で多数派である。読みに関する本問と同内容の問 57 では傾向が見られたのとは対照的である。リスニングの際は、それほど多くの注意資源を割けないことが原因かもしれない。しかし、非上位クラスの肯定的回答者の割合よりは十分に高い。したがって、本問の方略は、英語学習の成功に有効かもしれないが、普遍的なものではないといえる。

問 72 は、生の英語を聴くかを尋ねており、本問とリーディングに関して対応するのは、問 59 である。

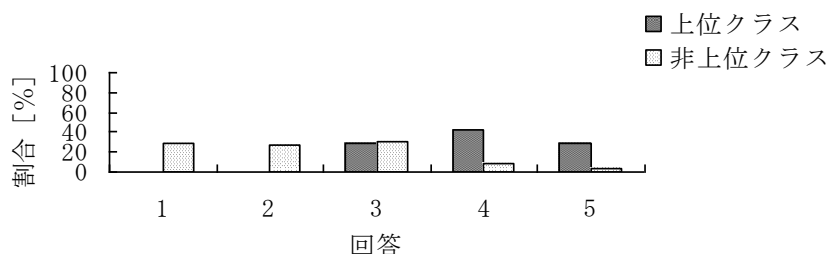


図72: 問72「生の英語を聴く」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 70%と、多数が本問の方略を支持する傾向が明確に現れている。非上位クラスでは、1または2の回答者の割合が 56%と半数を超えており、上位クラスと好対照である。上位クラスでは、読みに関する本問と同内容の問 59 でも明らかなように、生の素材に触れている上位クラス学習者が非常に多い。

リーディング、リスニングの両方で生の素材を通じたインプットを行なう上位クラス学習者の割合が高いことから、生の英語に触れることと英語の実力に強い相関が認められると言える。生の素材にも色々あるが、問 69 (多様な内容のリスニング) の結果から、特に、多様なものに触れることはそれほど重要ではない様子である。そうではなく、生の英語に触れること自体が学習成功につながると言えそうである。そのような素材を聴く際の姿勢として、内容重視であることが重要そうに思えるが、問 71 (リスニングを通じた情報取得) の結果からも、必ずしもそうとはいえない。ただし、生の素材であれば、当然ながら特定の形式の文が偏重して登場することはないはずなので、学習者が、生の素材に触れることが内容の獲得を主たる目的としていることを意識はしていなくとも、必然的に形式よりも内容重視の活動を行なっているといえなくもない。

リスニングに関する問 60 から問 72 の結果を総括すると、以下の様子が見える。リスニングに関する問いとリーディングに関する問いは、大半が同内容である。しかしながら、リーディングに関して観察される多くの傾向は、リスニングに関しては観察されない。

例えば、形式面に注意を払ったリスニング (問 61、問 62)、多聴 (問 67)、リスニングを通じた情報取得 (問 71) 等は、リーディングのような傾向を示さない。このように、リスニングでは、リーディングと同内容の方略は採られない傾向が強い。

リーディングの場合ほど形式面に注意を払えない理由は、リーディングの場合ほど、形式面に避ける注意資源が限られているからかもしれない。一方、訳に拘らずに聴く (問 65)、大意取得を目指して聴く (問 66) という傾向は、リーディングと同じである。したがって、リスニングでは、上位学習者でも形式にはそれほど注意を割かず、内容に対する注意の配分が高いようである。

ただし、そうは言っても、リーディングにおいて培った形式に対する最低限の知識は活用していると考えられるので、漫然と発話内容を聴き、何の根拠もなしに意味を取得しているということはないと予想される。

(2-3-7)

問 73 から問 81 は、スピーキングのための方略に関する。問 73 は、頭の中で英作文を行なうかを問うている。

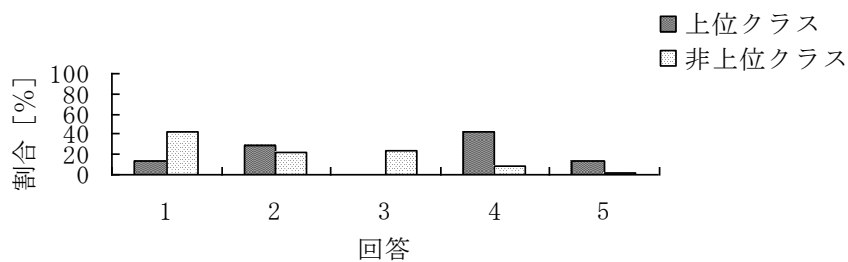


図73： 問73「頭の中で英作文」の回答結果

我が国で英語を学ぶ学習者にとって、英語を話す機会を見つけるのは簡単ではない。特別な環境に巡り合わない限り、英語を話す機会に自然に遭遇することは極稀である。頭の中でリハーサルを行なうことは1人でできるスピーキングのための訓練である。

結果を見ると、上位クラスでは、4または5の回答者の割合は56%と過半数であるが、1または2の回答者の割合も42%と高い。非上位クラスでは、1または2と回答した人の割合は64%でこちらが過半数である。上位クラスでは、否定的回答者と肯定的回答者の割合の差は十分ではないが、肯定的回答者の割合は過半数であることから、本問の方略が支持されているといえる。

この結果を、非上位クラスと比較すると対照的であることから、本問は、上位クラスでのみ支持される方略であり、したがって、英語の実力向上に有効であるといえる。ただし、上位クラスで肯定、否定の回答者の割合がやや拮抗しているため、普遍的な方略とまではいえない。

問 74 は、英語を話すための学習会に参加するかを問うている。

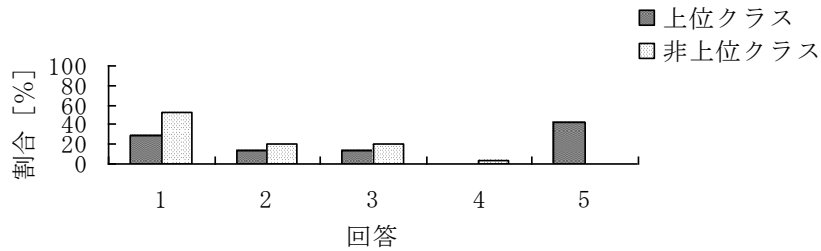


図74： 問74「英語を話す場への参加」の回答結果

結果は、上位クラスの肯定的回答者と否定的回答者の割合が同じであり、傾向はない。一方、非上位クラスでは、1または2の回答者が73%と大多数に及ぶ。上位クラスでは、支持と不支持が分かれているが、それでも非上位クラスで肯定的回答者がほぼ皆無なのに対して上位クラスでは42%と十分な差が認められるので、本問の方略はある程度有効であるといえそうである。

問75は、有用な英語表現を書き留めるかを尋ねている。

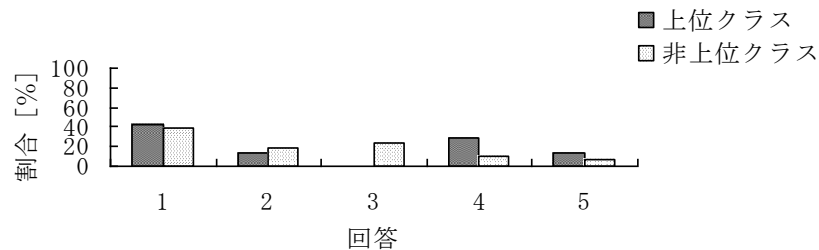


図75： 問75「英語表現を採録」の回答結果

1または2の回答者の割合は、上位クラスで56%、非上位クラスで57%と、両クラスで否定的回答者が過半数である。よって、本問の方略は、上位クラスに達するのに必要ではないといえる。

問76は、有用な英語表現を、書き留め、覚えるかの問いである。

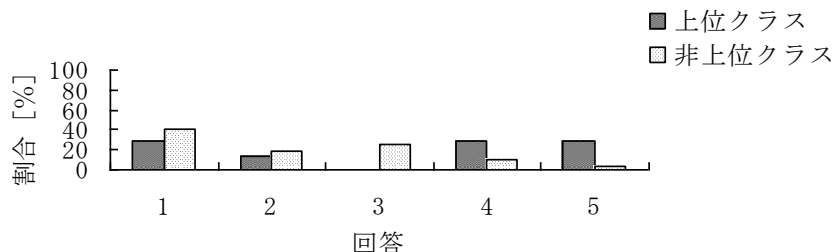


図76： 問76「英語表現を採録、記憶」の回答結果

上位クラスでは、4または5の回答者が56%と過半数で、非上位クラスでは1または2の回答者が57%で過半数である。上位クラスの結果は、問75と一貫していない。問75の結果が示すように表現を書き留めずに、本問の結果が示すように表現を書き留め、覚えるというのは不可能と考えられるからである。しかし、回答者が、問76の「記憶する」という表現を重視して、「記録はしないがその場で記憶しようとする」という趣旨で、問76に肯定の回答を返したとも

考えられる。そう考えると、問 75、76 の結果から、いちいち表現を記録するまではしないが、良い表現に気を止めて、記憶しようとする傾向があると言えるかもしれない。

問 77 は、シャドーイングを行うかを問うている。シャドーイングとは、耳から聞こえてくる音声に遅れないようにできるだけ即座に声に出して繰り返しながらついていくという学習法である⁸。

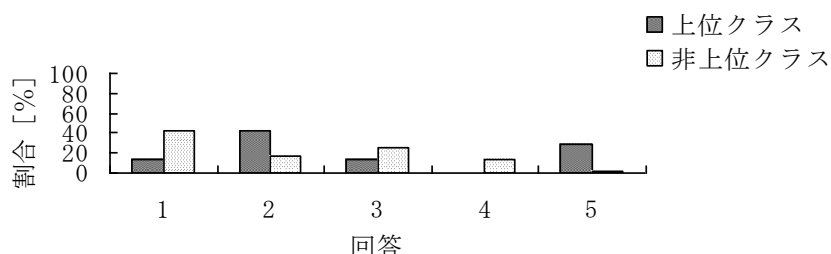


図77： 問77「シャドーイング」の回答結果

結果は、1または2と答えた人の割合が、上位クラスで 56%であり、非上位クラスで 59%となっており、本問の方略は、いずれのクラスにおいても支持されていない。シャドーイングは、通訳者の養成学校で採用されていること等からも有効な方略であるといえるが⁹、まだまだ浸透していないと思われる。しかし、上位クラスで支持されていないことから、本問の方略を用いずとも、上位クラスに達することは可能であると言えそうである。

問 78 は、英語で表現できなかった表現を覚えておいて後で確認するかを問うている。

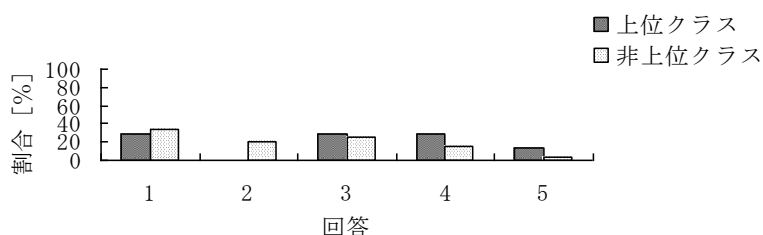


図78： 問78「表現できなかった表現の確認」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5と回答した人の割合は 42%である。非上位クラスでは、1または2の回答者が 54%で過半数である。上位クラスの肯定的回答者の割合 42%は、過半数に達しておらず、また1の回答者の割合 28%と十分な差を持っていない。このため、上位クラスで傾向は認められない。アウトプットの際に、自らの実力不足により表現できない内容に気を止めることを通じて英語運用能力が向上することがアウトプット仮説により想定されているが¹⁰、本研究の上位クラス学習者においては、そのような活動は行なわれていない。

問 79 は、自分の発音を矯正するかを問うている。

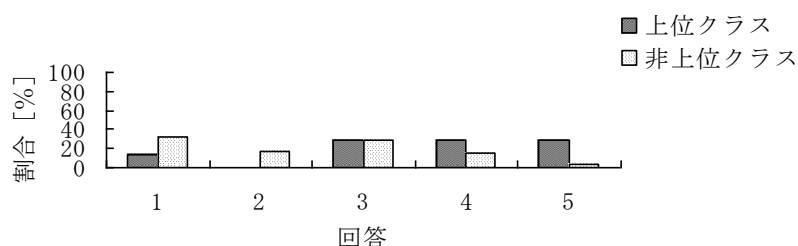


図79： 問79「発音矯正」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 または 5 の回答者が 56% と半数を超えている。非上位クラスでは、1 または 2 の回答者が 50% と、こちらが半数に達している。上位クラスでは、肯定的回答者の割合が半数を超えており、はっきりとした傾向が認められ、また、非上位学習者の 20% を大きく上回る。スピーキングを意味と形式の 2 つの側面に分けたとすると、発音は形式に属すると考えられる。アウトプットでは、形式にのみ注意を払うことはあり得ず、内容には必然的に注意が払われているはずなので、上位クラスの学習者では、形式も完全に疎かにするのではなく、一定の注意を払っていることを支持する結果と言えそうである。この傾向は、上位クラスに特有である。

問 80 は、英語を目的でなく会話の手段として用いるかを尋ねている。

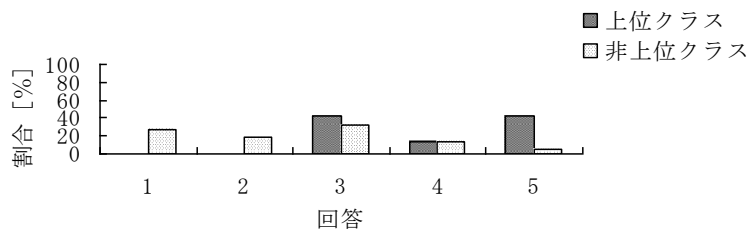


図80： 問80「会話目的の英語使用」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 または 5 と答えた人が 56% で過半数であり、非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合が 46% で半数に迫る。本問は、スピーキングの内容を重視しているか否かを問うており、リスニング、スピーキングを内容伝達のための手段として用いる活動を上位クラスの学習者が行なうことを示している。上位クラスで、否定的回答者が皆無であると同時に肯定的回答者の割合が高いことから、はっきりとした傾向が認められる。

問 81 は、英語の定形表現を覚えるかを問うている。

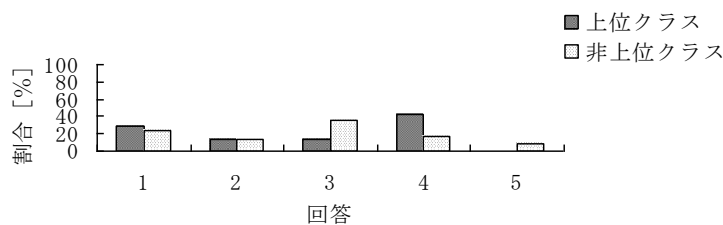


図81： 問81「定形表現記憶」の回答結果

結果は、上位では、肯定的回答者と否定的回答者の割合が等しく、非上位クラスでは、否定的回答者の割合が肯定的回答者の割合より若干優位であるように、傾向は認められない。

問 82 から問 86 は、ライティングに関する方略について尋ねている。問 82 は、英文を多量に書くか、つまり多読、多聴のライティング版とでも言える活動を行なうかを問うている。

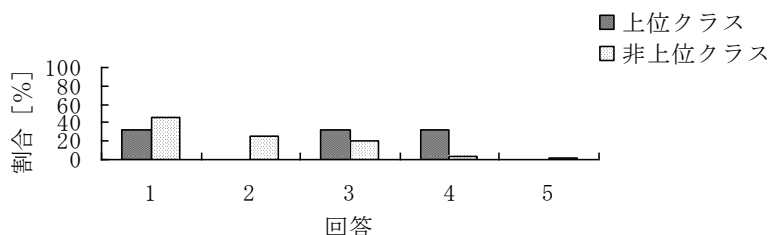


図82： 問82「たくさん書く」の回答結果

結果は、非上位クラスでは1または2の回答者の割合が 69%と傾向が観察されるが、上位クラスでは、傾向は全く認められない。英語運用能力はインプット活動のみでは不十分であり¹¹⁾、アウトプット活動は必要であるのだが、上位クラスの学習者が積極的にライティングに取り組んでいるという傾向は見られない。

問 83、問 84 は、それぞれ、ライティングの一例として文通、Eメールのやり取りを行なうかを問うている。

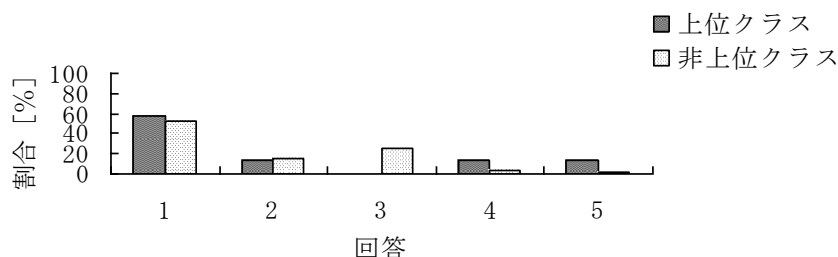


図83： 問83「文通」の回答結果

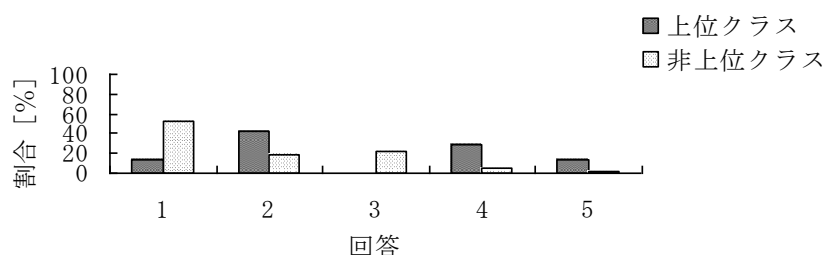


図84： 問84「Eメール送受」の回答結果

結果は、いずれの問いにおいても、両クラスも否定的回答者が大きく半数を超えており、これらの問いの方略は指示されていない。問 83、問 84 は、ライティングを内容に即した活動として行なうかを問うている。上位クラスの学習者の中でも本方略を実行している人の割合は低い。日本において英語のアウトプットの機会を自然に得ることは難しいので積極的な行動が必要である。

しかし、ライティングそのものを、学習することを超えてコミュニケーションの一環として行なうといったことは上位クラスであっても支持されていない。また、問 83、問 84 のいずれでも上位クラスで不支持であることから、ライティングの活動内容に偏りがあるわけではなく、やはり、ライティングそのものが支持されていないことが表れている。

問 85、他人が書いた文を利用して英文を書くかを尋ねている。

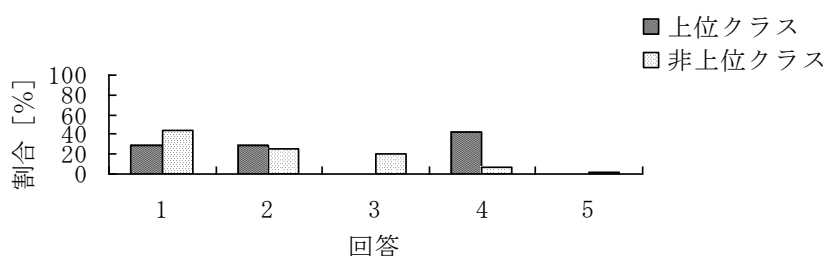


図85： 問85「英借文」の回答結果

以前に自分が遭遇した英文を採録、記憶しておいて一部のみを替えることによって文を創出する、俗に「英借文」と呼ばれる文の作製方法が知られている¹²。しかしながら、結果を見ると、両クラスにおいて、否定的回答者の割合が優勢であり、上位クラスにおいてもこのような方略は支持されていない。

問 86 は、自分の文章を添削してもらうかを問うている。

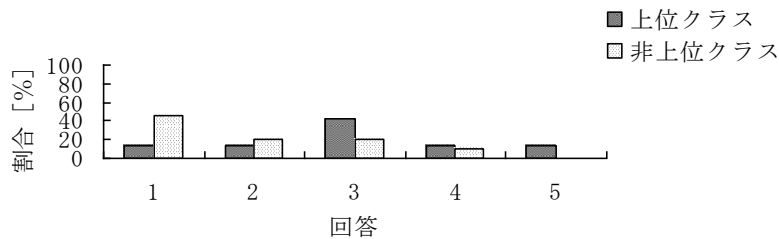


図86： 問86「添削」の回答結果

結果は、上位クラスでは傾向が全く表れていない。非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合が 66%と過半数である。問 82 から問 85 と同様に、上位クラスの学習者の中でも、実行している割合は低い。英語母語話者や添削ができる日本人を学習者の周りで見つけることが困難であるという、外部的要因が大きいことも考えられるが、他のライティング能力向上の方略使用の有無を問う問 82 から問 85 の結果からも、上位学習者であっても、ライティング能力向上のための活動そのものを行なう傾向が見られないことの結果のようである。

問 73 から問 86 の殆どは、目立った傾向を示していないか、上位クラスであっても不支持という結果を示している。強いて挙げれば、問 72 (頭の中で英作文)、問 76 (英語表現の採録および記憶)、問 78 (表現できなかった表現の確認) 等の上位クラスの支持率が、過半数であったことである。ただし、上述のように不支持の回答者も多いため、普遍的な方略とはいえない。唯一、問 79 (発音矯正) に明確な傾向が見られる。しかし、発音の良否は、英語を通じた意思疎通や内容理解に決定的な役割を果たすわけではないので、この方略が英語の上達と相関を持っているとはいえないと考えられる。ただし、自ら発音できない音を聞き取ることはできないという主張もあるので、発音矯正がリスニング能力向上を介して英語の上達に寄与する可能性はゼロではない。概して、上位クラスの学習者であっても、アウトプット能力の向上に直接寄与する方略は採っていないことがはっきりと表れている。

(2-4) アンケートの分類

上記の 43 項目に加え、すでに述べた前半 43 項目の回答結果を考慮して 86 問全体を鳥瞰し、さらなる傾向を探るために、各問いを結果の傾向ごとにグループに分類すると以下ようになる。以下の分類では、上位クラスと非上位クラスで傾向の対称性が観察されるもののみに注目する。両クラスに差が無ければ、そのような問いの内容は、英語の上達に相関性を持つとは考えにくいからである。

(2-4-1)

まず、上位クラスで強く支持され、非上位クラスで強く不支持のグループに属する問いを挙げる。具体的には、過半数が肯定の回答をし、非上位クラスで過半数が否定の回答をした問い、または上位クラスで非常に多くの回答者が肯定の回答を返した問い、またはこれらに非常に近い問いは、以下の通りである。

問 1	英語が好き	問 33	英語への毎日接触
問 8	学習目的保有	問 43	学習法随時選択
問 10	自主的学習	問 47	先を予測しながらリーディング
問 14	コミュニケーション相手有	問 58	リーディングを通じた情報取得
問 15	対応日本語意味のみで単語記憶しない	問 59	生英語のリーディング
問 17	発音記憶	問 63	先を予測しながらリスニング
問 24	単語のイメージ使用記憶	問 69	多様な内容のリスニング
問 25	コロケーション記憶	問 72	生英語のリスニング
問 26	英英辞典の使用	問 79	発音矯正
		問 80	会話目的の英語使用

以上の問いの内容をまとめると、以下の傾向が見て取れる。上位学習者は、強い学習目的を持って実際に自主的に学習を行ない、学習の一環として毎日英語に触れている。単語を記憶する際は、日本語の対訳のみに終始せず、発音やコロケーションも記憶し、英英辞書を使用する。学習法に注意を払い、適宜選択する。先を予測しながらリーディングやリスニングを行い、生の英語を読み、聴き、また、リーディングを情報取得に用いる。自分の発音を矯正し、会話目的で英語を使用する。以上をさらにまとめてみると、上位クラス学習者は、強い学習目的を持って実際に目的達成のための行動を取っており、英語には毎日触れ、生の英語を目および耳の両方から情報としてインプットしている。実際に読み、聴きする際は、内容に注意を払って先を予測している。スピーキングは実際の会話の中で使用する。

以上の結果からは、上位クラスの学習者は、自然な英語への目、耳の両方を通じたインプットをしっかりと実践している。逆に、アウトプットだけのための方略は、殆ど行なわれていないという結果も表れている。内容重視で自然なインプットに大量に触れることでアウトプットの能力を間接的に向上させた様子が伺える。

(2-4-2)

なお、以下の問いは、上の分類に当てはまるが、上位クラスでの不支持回答も多い問いである。

問 40	良い学習法に遭遇	問 41	復習実践	問 76	英語表現を採録、記憶
------	----------	------	------	------	------------

これらの問いは、上位クラスでの傾向が明確ではないので、英語運用能力の向上に寄与するかは不明である。

(2-4-3)

次に、上位クラスで強く支持されており、非上位クラスで緩やかに不支持の問いを挙げる。

問 7	英語母語国への憧れ	問 23	単語の用法確認
問 12	英語授業の理解度高	問 27	単語の原義理解
問 21	品詞記憶	問 57	直解のための読解法の工夫

これらの結果は、先の上位クラスで強く支持され非上位クラスで強い不支持の問いと一貫している。つまり、英語を母国語とする国への憧れは学習目的の強化につながり、単語の品詞、用法、原義の理解は、発音、コロケーション、英英辞書の使用とあいまって、一層の単語の立体的、多面的理解を導いている。このように、上位クラスで強く支持されている方略の特徴の1つとして上位クラスでは、単語に関する知識の広さ、深さが挙げられる。単語をより多様な形で習得することが単語の応用力につながり、上位クラスの学習者のレベルに到達する1つの手段となっていると考えられる。

授業を良く理解できたことは、上位クラスの学習者の潜在能力が高かったとも解釈できるが、むしろ英語に興味を持って学習に取り組んだ結果であると解釈してよいように思われる。他の問いから、上位クラスの学習者は、非上位クラスの学習者と異なり相応の努力を払っているからである。さらに、授業の理解度向上が成果的動機づけを高めるといった正のスパイラルが生じ、実力向上が促進されているといえる。

(2-4-4)

次に、非上位クラスで傾向が観察されないので上位クラスで特有とはいえないが、上位クラスで強く支持されている問いを列挙する。

問 44	構造を意識しながらのリーディング	問 51	多読と精読の使い分け
問 45	文法を意識しながらのリーディング	問 52	訳を意識しないリーディング
問 50	多読	問 65	訳を意識しないリスニング

これらの結果から、まず、上位クラスでは、構造や文法といった形式を意識した読解を行なっていることが傾向として挙げられる。上位クラスの学習者は、英文を直感や雰囲気ではなく理性的、分析的に理解する傾向を持っている。しかし、同時に形式にのみ注意を払うのではないことが問 52、問 61 から支持される。つまり、上位クラスでは、形式に基づいた理解を基礎に内容に注意を払うといった方略を実践している。さらに、上位クラスでは、多読を実践し、多読と精読を使い分けている。以上より、上位クラスの学習者は、形式面と内容面に注意を払ったインプット、特にそのようなリーディングを実践しており、多読にも取り組んでいることが分かる。

(2-4-5)

次のグループは、上位クラスで緩やかに支持され、非上位クラスでは強くまたは緩やかに不支持の問いである。

問 60	リスニング時間確保	問 67	多聴
問 64	既知内容のリスニング	問 68	リスニングでのインプット重視

これらの結果は、上位クラスの学習者が、既に述べた多読の活動に加えて、リスニングに割く時間を確保し、リスニングの重視とリスニングのための訓練も一部行なっていることが示されている。

(2-4-6)

最後のグループは、非上位クラスでは強く不支持であって、上位クラスで傾向が殆どあるは全く認められないが、上位クラスの支持率と非上位クラスの支持率の差が顕著な問いである。

問 70	直解のための聴解法の工夫	問 73	頭の中で英作文
問 71	リスニングを通じた情報取得	問 78	表現できなかった表現の確認

これらの方略は、上位クラスで広く支持されているわけではないが、英語力の向上に相関を持つと考えられるものである。

(3) 結論

以上、全 86 問のアンケート分析結果を俯瞰して要約すると以下のような結論となる。特有の傾向として、上位クラスの学習者は、強い学習目的を持って毎日英語に触れることを含め自主的に学習に取り組んでいる。具体的な学習法をどうするかは英語上達と相関が低い。単語を多様な側面から理解し応用力を高めている。生の英語を目および耳の両方から情報としてインプットし、その際、特にリーディングで形式を通じた理解を基礎に内容取得を意識している。インプットに多くの時間を割く一方で、アウトプットだけのための訓練は、暗記を含めて行なっていない。以上の傾向が上位クラスに特有の特徴として観察されている。

(4) 今後の課題

最後として、より厳密な結果および分析を得るために以下のような課題が挙げられる。まず、上位クラスの回答者が少なかったため、より多くの回答者を確保することが望まれる。回答者の大半が、指導教員のご協力を通じて回答を得た大学生と、筆者の周りの人に限られた。このため、上位クラスに属する回答者が非常に少なく、1 人の回答者の回答が傾向を大きく左右する結果となってしまった。これは、統計的な傾向の信頼性を低下させる結果につながってしまう。このため、より多くの回答を得る方法が求められる。

次に、選択式の問いのみからなるアンケートを採用したことに関する。上述のように、このようなアンケートは、回答者を見つけさえすれば回答自体を得ることが容易であるという利点、および比較的同様の条件で回答者に問いを投げかけられるという利点を持つ。他方、質問の意図が十分に回答者に伝わらないために、回答者の本来の回答を得られなかったかもしれない点が指摘され得る。このような問題点を克服するためには、アンケートの回答に先立って質問の内容を説明する方法が考えられる。

また、本研究は、自らの経験に基づいて効果的と思われる英語学習法の要因を抽出して独自にアンケートを行ったが、本研究の結果と、本研究を進めるうえで参照した個々の先行研究の結果との比較考察も今後の課題としていきたい。

【註】

- 1 森利昭, 中条和光, pp.50-51
- 2 金谷憲[ほか](2004)
- 3 村野井仁(2006), pp.12-14
- 4 田崎清忠[ほか](1995), pp.296-304 ; Richards & Rodgers (1986), pp.204-222
- 5 Ibid.
- 6 畠山雄二(2003), pp.38-39
- 7 村野井仁, p.13 ; Long (2007), pp.123-124
- 8 門田修平, p.11
- 9 Ibid., pp.175-176
- 10 大喜多喜夫, pp.235-239
- 11 Ibid.
- 12 國弘正雄(1999), pp.291-300

【参考文献】

- ・ Ellis, R. (1997) *Second Language Acquisition*, Oxford, UK: Oxford University Press [牧野高吉(訳)(2003), 『第 2 言語習得のメカニズム』, 筑摩書房]
- ・ Long, Michael H. (2007), *Problems in SLA*, Lawrence Erlbaum Associates, pp.123-124
- ・ Richards, Jack C. & Rodgers, Theodore S. (1986), *Approaches and Methods in Language Teaching*, Cambridge Language Teaching Library

- ・ Simon, Cole 「日本人英語学習者と修辭的疑問」『京都産業大学論集 人文科学系列』 第 42 号, 2010 年 3 月, pp.54-72
- ・ 相澤裕寿「英語の苦手, つまずきとはどんなことか」『新英語教育』第 495 号, 2010 年 11 月, pp.10-12
- ・ 泉恵美子「外国語活動にふさわしい評価方法とは」『英語教育』第 59 巻第 9 号, 2010 年 11 月, pp.16-18
- ・ 内田幸司「英語学習の動機付け」『日本放射線技術學會雑誌』第 66 巻第 4 号, 2010 年 4 月, pp.387-388
- ・ 大喜多喜夫(2000), 『英語教員のための応用言語学』, 昭和堂
- ・ 門田修平(2007), 『シャドーイングと音読の科学』, コスモピア株式会社
- ・ 國弘正雄(1999), 『國弘流英語の話し方』, たちばな出版
- ・ 金谷憲他[ほか](2004), 『和訳先渡し授業の試み』, 三省堂
- ・ 酒井邦秀「多読・多聴クラス見学記(上)志学塾・豊田高専」『英語教育』第 59 巻第 2 号, 2010 年 5 月, pp.66-68
——「多読・多聴クラス見学記(下)鷗友学園・都立大田桜台高校」『英語教育』第 59 巻第 3 号, 2010 年 6 月, pp.67-69
- ・ 白井恭弘(2008), 『外国語学習の科学』, 岩波新書
- ・ 竹内理(2000), 『認知的アプローチによる外国語教育』, 松柏社
- ・ 田崎清忠[ほか](1995), 『現代英語英語教授法総覧』, 大修館書店
- ・ 田中裕実, 原口友子「大学生英語学習者の英語語彙サイズに関する一考察」『富士常葉大学研究紀要』Vol.10, 2010 年 3 月, pp.117-129
- ・ 津村修志「英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係」『大阪商業大学論集』第 5 巻第 5 号, 2010 年 2 月, pp.27-42
- ・ 中原功一朗, 中川伸子「「コミュニケーション重視」の英語教育に対する揺り返しと英語教育のあるべき姿」『経済系』第 245 号, 2010 年 10 月, pp.119-135
- ・ 原田康也, 鈴木正紀「大学新入生の英語リスニング・スピーキング熟達度の定点観測に向けて」『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』Vol.110, No.63, 2010 年 5 月, pp.21-25
- ・ 深田芳史「英語学習促進要因としての想像コミュニティに関する量的研究」『明星大学研究紀要 人文学部』Vol.46, 2010 年 3 月, pp.1-18
- ・ 蒔田守「自宅で音声を振り返らせる課題--生徒に自分を客観的に見つめる機会を与える」『英語教育』第 59 巻第 7 号, 2010 年 10 月, pp.28-30
- ・ 村野井仁(2006), 『第 2 言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』, 大修館書店
- ・ 畠山雄二(2003), 『ことばを科学する』, 鳳書房
- ・ 望月肇「日本の学校英語教育におけるシャドーイング実践研究」『第二言語としての日本語の習得研究』Vol.13, 2010 年 12 月, pp.71-94
- ・ 森利昭, 中条和光(2005), 『認知心理学キーワード』, 有斐閣双書